

一緒に考えよう！村民発・なかがわの学校のあり方座談会 第6回 ～ 新しい校舎のこと話そう編 ～

◎令和6年6月9日10時～12時 NVサウンドホールにて 参加者約30名程度

◎主催「なかがわ夢みる学校プロジェクト実行委員会」代表：池田彩美(中通)

◎座談会の趣旨：「中川村新たな学校づくりプロジェクト」教育委員会から説明いただき、現状について知る場をつくる。また、学校に関わる全ての子どもと大人たちが「幸せに生きていく」ためにどうしたらいいか？中川村や近隣地区ふくめ学びの環境、内容、新しい校舎のこと等について「いろんな立場の人が話し合える場、一緒に考えてみる場」をつくる。

今回は特に「校舎」「学校空間」について、建築関係の仕事をしてきた秋山さんをゲストに迎えて考える。



子ども コーナー スラックラインなど

1、「校舎はどう決まっていくの？」片桐教育長のお話

(★教育委員会の方に、新しい校舎の建設がどのように進んでいくのかについてきこう)

- 新たな学校開校までのスケジュールの説明
- 「新たな学校づくり委員会」公募委員募集について。高校生～20代を若者枠として設定も。
- 「基本計画」作成へむけて、これから「新たな学校づくり委員会」をたちあげ、話し合いをしていく段階である。基本計画は令和6～7年度にかけて作成。
- 県立高校で進められている「長野県スクールデザインプロジェクト」(※注1)には、学校を建てるときにどういう考え方で作っていくか？が示されている。
- 学校を構成する4つの空間として①学習空間、②生活空間、③執務空間、④共創空間があげられている。(※注2)

- 今までどこへ行っても「あれは学校だね」ってわかる形をしていたけど、いま色んなところで先行して実践されている事例を見ると、「子どもたちがどう学べるか、過ごせるか」、「先生方がどう働けるか」とか、「地域とどう関わられるか」という視点をもって、新しい学校の形ができていて感じる。
- 先日愛知県の飛鳥学園(※注3)へ行ってきた。そこは教育の考え方に合わせて学校の校舎ができていてということで、非常に参考になった。これからも見学など通じて実際に様子を見ていきたい。
- 校舎についてはみなさんすごく関心のある部分だと思う。お金がかかるのが課題。自然エネルギーの活用とか、いろんな要素がある。
- 学校だけじゃなくて箱物を作ること自体がこれからは大変な時代になっていくと思う。ちなみに歴史民俗資料館を増改築している。いままで高齢の方に不自由だったり、人の来にくいところだったと思うが、改善したい。4億円の予算で始めている。

.....

※注1「長野県スクールデザインプロジェクト(NSDプロジェクト)」

長野県教育委員会が実施。「学校の環境整備を通じて個人と社会のwell-being(ウェルビーイング)の実現」を目的とし、『学びと空間の一体的改革』を方針として掲げる。空間については、「児童生徒や教員がいきいきと活動でき、地域の方々にとっても学びや交流の拠点となる豊かな空間を整備」することを理想としている。

https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/nsd/nsd_toppage.html#ongoing-projects

※注2 学校を構成する4つの空間

1. 学習空間・・・知識を蓄える学びから、能動的な活動により理解を深める「探究的な学び」の実現。課題発見・調べ学習、グループワーク、発表、様々な学習スタイルに対応する空間
2. 生活空間・・・リラックスし、生徒交流等を生む生活空間。居心地を良くし、快適な学校生活が過ごせる空間へ
3. 執務空間・・・教科毎研究室の分散配置から、教員全員が集う大職員室の設置へ。教員間の意見交換等を容易にし、生徒が相談しやすく自主的な学習を手助け
4. 共創空間・・・地域や社会の方が学校に来訪し、一緒に考え、何かを創造する地域連携協働室等

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/koko/dezain/documents/02.pdf>

※注3 愛知県飛鳥村立飛鳥学園(義務教育学校)

愛知県飛鳥村立の施設一体型小中一貫教育校として平成22年4月に開校し、令和2年4月から義務教育学校。→飛鳥学園HP「施設配置の考え方」

<https://www.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=2310035&frame=frm4bfa31e15f821>

.....

2、「わくわくする校舎について話そう！」秋山史織さんのお話

(★子どもたちや先生たちが毎日過ごす空間。地域とつながるスペース…。新校の校舎について、日本のいろんな事例をみながら話そう)

(★ゲスト:秋山史織さん熊本県出身、中川村に移住して4年目。東京の「ニコ設計室」にて設計業務に従事した経験をもつ。2児の母。)

- 校舎について自分がどんなものかいいと思うか？いざ考え始めてみたら、あまり思い浮かばなかったので、せっかくなので勉強してみることにした。
- 建築関係者の方には物足りないかもしれないけど、むずかしい話はありません。学校建築の専門家でもなんでもないで笑
- いま、学校という思い浮かべるのはだいたい箱型のものだと思う
- その歴史をひもとくと、そもそも「地域なりのやり方で建てていいよ」という方針だったのだけど、戦後人口が増えて「校舎を量産しなきゃ」ということで、どんどん同じような校舎が建っていった。その結果、70年前の建築がみなさんの頭の中に残っているという・・・。

- でも70年前とあきらかにいろんなこと、例えば人との距離感や人口など変わっている。なのに校舎が変わっていないのが問題なのかな、と思う
- 70年前の学習指導要綱と現在の学習指導要綱の違いを比べてみると、特徴はとにかくこの時代は「学習量の多さ」「低学年なのにむずかしいことを覚えないといけない」ということで、先生から生徒へ一方的に教え込まないと間に合わないような内容だったのかなと思う。
- 現在の学習指導要綱(2017年～)では社会の多様化複雑化を背景に、「生きる力をつけるための学び」になった。自分としては「いいなあ、今の子どもたちは良い学びをするんだろうなあ」、と思った。より主体的に、自ら学び、自ら考えることを重視するような学び。
- これだけ教育の「ソフト」が変わってきているのに、教育の「ハード」つまり校舎が変わっていないことに課題があるのかも。
- 私が今までお客さんと関わってきた感触として、「建築」と「中に住む人」の方向性がマッチしたときは、話していてもどんどん未来の話が出てきて、希望が湧いてきてつきない。そんなことをなんとか実感することがあった。
- 逆にマッチしていない場合、「使われていない空間」が増えていく。容量は足りているのに動きづらい、ということも起きたり。かなしいのは「好きになれない」ということ。もし学校でそういう事が起こったら、、、と考えてしまう。
- できればいつまでも興味のつきない探究を子どもができるといい。逆に、反対のことがおこらないといいなと思う。

===

◆ここからは実際の事例を。みための好き嫌いがでてくるとおもうが、それを今日はいったん置いてもらって、いったんインプットするということを意識してもらえたら。

▶case1 埼玉県宮代町立 笠原小学校

<https://www.fureai-cloud.jp/kasasho/>

- 1982年に建設。「竜宮城」とよばれたりする。この学校をみるツアーがあったりする。
- デザインしたのは「象設計集団」
- 四角い画一的なシンボルの校舎が全盛期のころに、学校建築では魁として語られる。受け入れた自治体の人がすごいなおもう
- そのコンセプトは「がっこうはまち、きょうしつはすまい、がっこうはおもいで」
- 学校の配置が普通じゃない。まちがもっている特有の風景にならって作られている。その地域には屋敷林という台風などの暴風から家を守るための林がある。「子どもたちを屋敷林のようにまもる」という意味がこめられている。
- 考えてみると、今までの校舎はどこに建ててもみんな同じ、というのがそもそもおかしかったのではないかと。思う。「自分たちの学校」ってなりにくい。
- 「じぶんたちのもの」「自分たちの学校はこういうわけでこうなったんだよ」と子どもたちから語ってもらえるような校舎になるといいなと思う。
- 笠原小は雑多で、ごちゃごちゃしている。配色も奇抜、そろっているような柱に文字があったり、手すりもそろばんになっていたり、ぐるぐるがあったりする。
- スケール感の強弱もおもしろく、雑多で統一されていない空間で子どもたちは何を考えるかという、「自分の居場所はここからここまで」とか「ここが私のお気に入りの場所」というのをみつける。
- 大人はこのごちゃごちゃ感がすごく苦手だと思う。
- 子どもにとってはこういう場所だと、脳みそや五感を使って勝手に行動し始めるんじゃないかなと想像する
- 専門的な用語でいうと「アルコーブ」(くぼみ)、出っ張りやくぼみの空間が多い。最近よくとりいれられている。休み時間にこもって、おままごしたりとか手遊びしたりとか、居場所になる
- すみっこに隠れたれたり、廊下もまっすぐになっていないなど。
- また「あいまいもこうかん」というのが取り入れられていて、教室を移動する時必ず外を通して移動するようになっていたりする。校舎の中にもものすごく「外」がはいりこんでいる。常に「外」を感じながら過ごしているような状態。

- 笠原小では選択制で「はだし」で過ごす子どもがいる
- 外と中がはっきり分かれているのではなく、「あっちーこっち」行ったり来たりする。これは「季節を知る、感じる、幼少期の記憶が人間の一生の基盤を形成する」という考えに基づいたデザイン。
- 「教室と外の連続性」といいながら、従来通りの校舎を作っていたらどうやってそれは達成されるのか？「建築が寄り添う」ことで、おもう教育が実現する。

==

▶case2 千葉市立 打瀬(うたせ)小学校

<https://www.city.chiba.jp/school/es/114/index.html>

- 1995年に完成。設計者は「シーラカンス」(現・シーラカンス&アソシエイツ)プロポーザル形式で成立。教育移住につながって、このエリアに3校新たに学校がたつという現象がおきている
- 校舎内はオープンスクール形式で、外にも中にも「壁がない学校」として、開校時から話題に。
- オープンスクール形式＝開かれた学校は全国にいろいろな事例あるが、打瀬小の場合①教室をひらく②外にひらく③地域にひらくということがうたわれている。
- 「教室をひらく」では、高学年は集中するために開放度すくなく、低学年は開放度おおく、と分けている。階段での授業もできるように設計されている
- みんなで閉じた空間のなかでいっせいに授業する、という時代から、ひとりひとりの個性を大切に、ひとりひとりの心地よさを大事にするという考えが出てきている中で「教室をひらく」という形が出てきている
- 「外にひらく」では、低学年ブースはあいだに中庭がある。外にも教室があり、座る場所や外黒板もある。いろんな種類の「外」があり、夏の庭、ランチの庭、ガラスのアーケード街みたいな空間などあり、「自分だったらどこにいくなあ」とわくわくする
- 中川村は自然や風景が豊かなので、村の人の感性も素敵。そういう感性を持ってもらえたらと強く思っている
- 「地域にひらく」では思い切ったデザインをしている。フェンスや塀はなく、入ろうと思えば気軽に誰でも入れる。隣接の公園にだれでもはいれて、そのとなりに校庭がある。講演にあそびにきた小さな子が校庭にはいつてきて、お兄さんお姉さんと遊ぶ、なんていうこともある
- 駅までのショートカットができる抜け道(「パス」)が学校のまんなかにおおって、一般のひとも普通に通る。防犯など心配するかもしれないが、大阪の池田小事件があったときも「かこわなくて、みんなで見守るから」という地域住民からの意見があった。未だにフェンス等作られていない。
- 地域の連携とか「つながり」ということが大事になる中で「どこから学校で、どこまでが地域か？」をくっきり分けないというのも一つのアイデア

===

▶case3 学校法人軽井沢風越(かざこし)学園

<https://kazakoshi.ed.jp/>

- 長野県軽井沢に所在
- 幼稚園～小中学校(義務教育学校)までが同じ敷地内にある
- 「主体性」「探究心」を伸ばすための教育に重点。いまの学習指導要綱よりさらに上をいっている感じ。とびぬけたソフトに対して、建築がどのように寄り添っているか？
- 浅間山が土地にとっての大きな財産、という考えに基づき「浅間軸」というものが大切にされている。浅間山にむかって建物が建っているような。
- 「それって意味あるの？」と思う人もいるかもしれない。しかし設計している人はまず無意識に「四角」を書いてしまう。設計者ですら、そうなるので、「ここでしか建てられない形ってなんだろう」ということから考えていくために重要だったのではない。
- こういう「軸」をスタートラインにすえるということは、今日話した3つの学校にすべて共通している
- たぶん子どもたちも「どこからでも浅間山が見えるんだよ」という話をしてくれると思う。「自然が先生である」というメッセージをわたしは感じた
- 例えばピアノの例。ふだんは子どもたちはバラバラになっているけど「注目！」と言ったときはぐっと注目できるようにしなかけになっている
- もうひとつの軸は「ライブラリー」。気になったときはいつでも図書館にアクセスできるようになっている。「図書館のなかに学ぶ場所がある」みたいなかたち
- 必要な機能と必要なかたちを考えると「子どもたちと本を近づきたい」という強い意志があると感じる。子どもたちも実際本をよく読むとのこと

====

◆中川村ではこれからプロポーザルをおこなうことになっていくが、「中川村ってこうだよな」という設計者の意思が、村人が大事にしたいと思っていることと、違ってしまふかもしれない。それどころか設計者の考えによっては、そもそも「軸がない」設計をつくるかもしれない。逆に「軸」さえしっかりしていれば、多少お任せしても方向性はぶれないんじゃないかなと思う

====

(質疑応答)

>プロポーザルってなに？

- 設計者側から説明すると「プロポーザルの情報が流れてくる」→→公募始まる。そこには「要件」「敷地見学について」などがホームページで示される→→現地へ行って、敷地をみて関係者から話をきいたり、その土地の美味しいものを食べたりして、その場所について知る→→「できるな」と思ったら作業に取り掛かる。提案方法などは発注者によってそれぞれだが、「A3 5枚と、見積書をつけてください」みたいな形式がおおい。
- 設計事務所側からするとものすごくコストがかかる。すごい熱量と時間をかけて、若者が何日も徹夜して日々の業務をこなしながら、受かるかもわからないコンペに対して情熱を注ぐ。とてもリスクのあること。
- そして提出し、うかつたらプレゼンの機会を与えられる。そして選考で選ばれる。
- いいものができるかもしれない、楽しいことができるかもしれない、というモチベーション、わくわくだけでやっている
- この自治体にとって必要だとおもって提案しても、自治体が違うことばかり気にしてたり、そもそも「こうしたい」という要望が薄いか。そういう感じのプロポーザルだとリスクが高いのでそういうのには参加したくないなと思う。わくわくしないプロポーザルには多分人が寄ってこないのでは
- また、要件の中に「今まで学校建築の経験があること」と書かれると、可能性を狭めることになるかもしれない。打瀬小学校を設計したシーラカンスは初めての応募だった。もし当時その要件が入っていたら、打瀬小学校はできなかったと思う。

【参考】「校舎のデザインはどう決まる？」
中川公民館報310号 2024.5 記事(一部省略)

中川村新たな学校づくりプロジェクト② ~みんなで考えよう！わたしたちの新しい学校~

校舎のデザインはどう決まる？

新校はどんな校舎になるのかな…？皆さんの気になるところだと思います。校舎建築は「**プロポーザル(企画競争)方式**」で最適な事業者が選ばれ、デザインなどが決まっていきます。

その際に重要なのが、新校の「**基本計画**」です。新校の規模・予算・スケジュールと共に、**どんな学校にしたいかが明確であること**がとても大事で、提示された基本計画をみて「このプロジェクトを中川村の皆さんと一緒にやってみよう！」という設計事務所や建築業者などが手を挙げ、提案を出すことになります。

明確な基本計画があり、想いと形が重なりあうほど「よい学校」ができるのではないのでしょうか？
では、その大事な基本計画を検討する場はどこかという、今年9月に始まる「**新たな学校づくり委員会**」です。令和6年度は公募委員含め20名余りの委員が、カリキュラム・地域交流・地域連携の3部会に分かれ、主に教育内容について話し合います。
委員以外の人でも想いや意見を伝えたり、語り合えるような機会は今後もあるとのこと。私たちの想いが伝わる基本計画をつくりたいですね！

R6 R7 R8 R9 R10 R11 R12 R13以降※

基本計画 (新たな学校づくり委員会) 基本設計 実施設計 建設工事 開校

.....

(休憩)

.....

3、ゆるっと意見交換会

(質疑応答)

Q参加者: 建築の部分は公募検討委員などあるか？

A教育長: 建築にかかってはこれからの検討となると思う。来年度(令和7年度)がその中心になると思う。オープンな教室という話があったが、視察にしている学校は夏場しか見てなくて、冬場見ていない。稲荷山養護学校という県産材の木でつくった校舎がある、有名な建築家の方が建てて見学もよくこられるが、非常に使いづらい。例えば開かない窓があって、熱がこもってしまう。子どもたちがとてもじゃないけど生活できない。開放的に木を組んでデザイン性はいいが、冬場がさむい。こどもたちの生活空間としているんなら不具合が出てくる状況もある。教育上の「こうあったらいいな」ということと、生活上の「こうあったらいいな」という視点も大事だと思う。

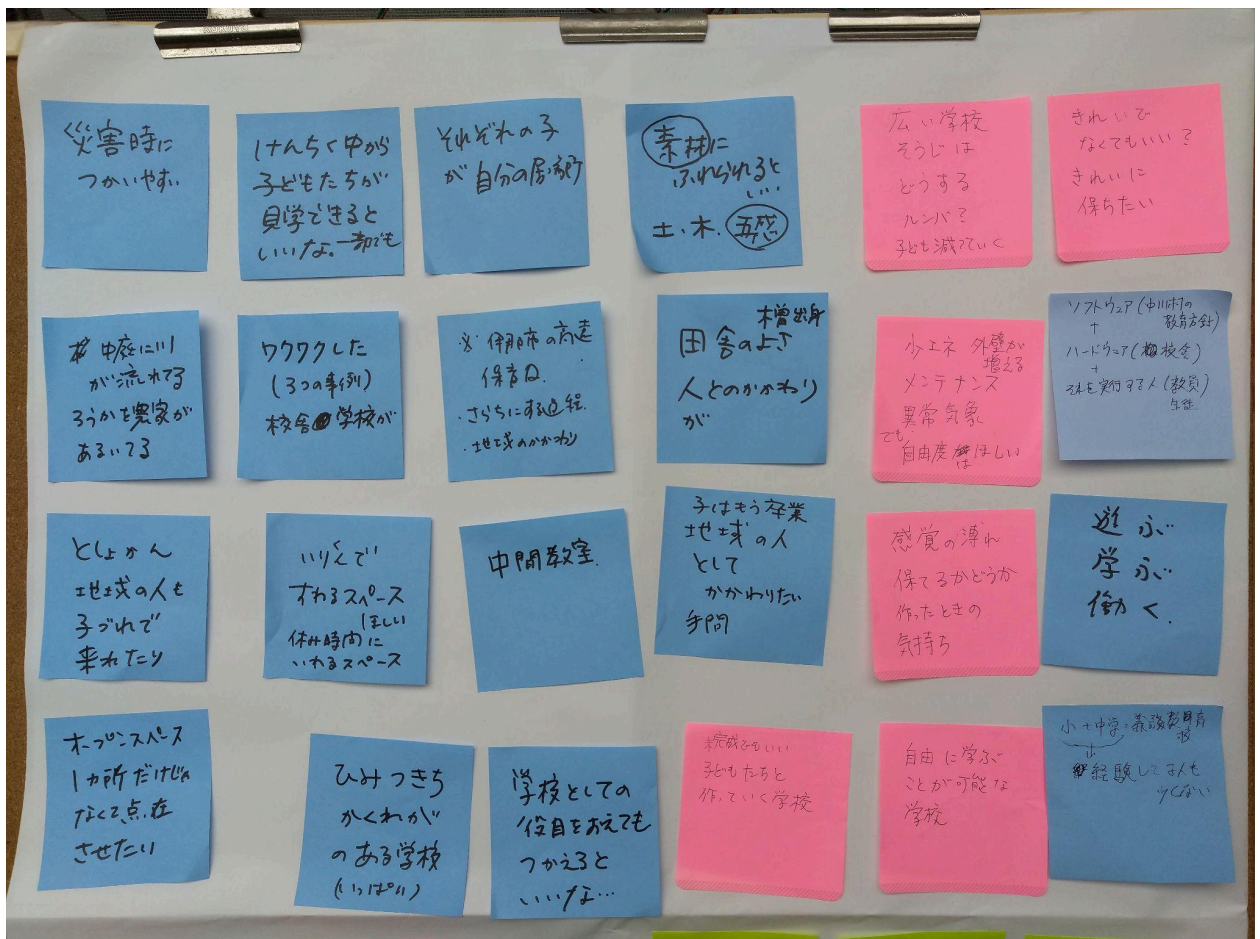
Q参加者: 一方通行でものが決まってしまうとしたら、すごく残念。住民の意見がでてきたとき、専門家のかたにスパッと切られて終わってしまうのではなく、「別の方法を一緒に考えようよ」というような場があるといいと思うが？

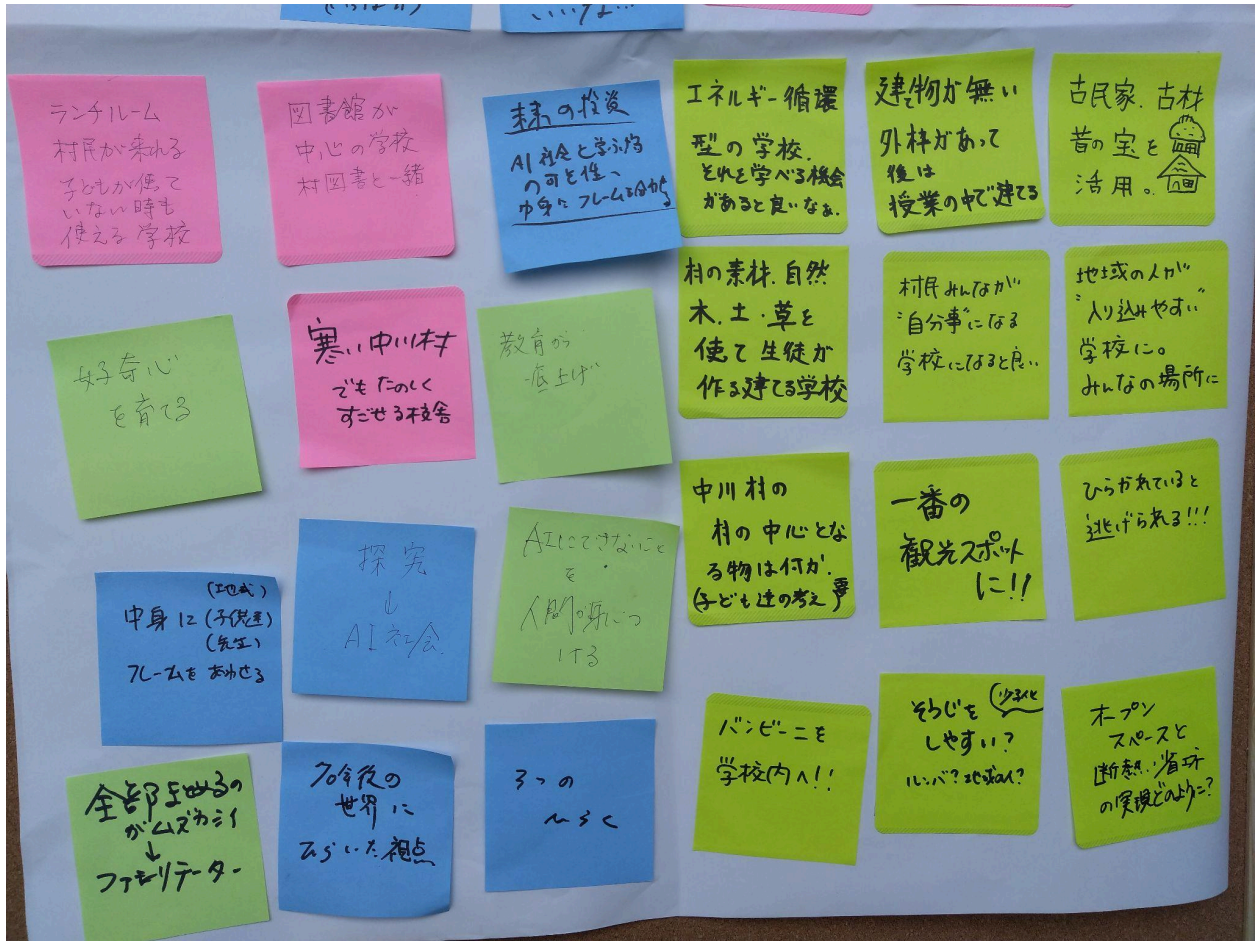
A教育長: 今年度は教育内容などに関しては、話し合いの中で決めていくようなかたちを想定しており、一方的に決めるということはない。

参加者: (意見)伊那新校と小諸新校が「うまくいかなかった」と言われる理由は、建築サイドが中身を答えられないにもかかわらず、ゴリ押しで進めてしまったこと。地域と建築側のコミュニケーショントラブルが起きてしまった。つくる人と市民が同じテーブルで話せないというものができない。伊那では「お金が足りなかったら、企業がお金集めて出します」という話もあったがそれをうまく汲み取れなかった。

(参加者が複数5~6名に分かれて、グループトーク)

(各グループからのシェア)





(終了)

参加者アンケートより

▶あなたは新たな学校がどのような校舎だったらワクワクしますか？

決められたスタイルではなくて自由な形で学べる学校だったら良いと思う。

先生や児童だけでなく、村民(保護者以外の方も含め)も気軽に立ち寄れる空間がたくさんあるような校舎。例えば、ランチルームを開放して、毎日が難しいなら、週に一度など子どもたちと一緒に給食が食べられるようにするなど。

みんなで作ってあげていく、過程も関われる、風土を生かした校舎、みんなが生き生きと過ごせる校舎

住民にも開かれた校舎がいいですね

オープンな空間、外と中のあいまいな空間、門や囲いが無い地域の人でも気軽に入れる学校。本がいつでも手に取れる環境。

グループワークでも話したのですが、

- ①図書館を村の図書館と一体化し、村民がだれでも利用できる場所に。ソファ、ラグなどあり、好きな場所で読める。
- ②ランチルームをだれでもカフェ的な場所にして、村民も利用(もちろん有料で)できるところにする。チャオでやっている(火曜日に)縁側喫茶みたいなものもそこでやる。「給食」という言葉じゃなくて「ランチ」という言葉にする

多種の素材にふれられる場所。それぞれの子どもの居場所になるところ、形。作る過程をシェアすると自分事になる。いつか学校としての役目を終えても、地域に愛される場所に。

未来の視点で、健康、和平が継続する場。学校は場の積み重ねだと思います。

多種の素材にふれられる場所。それぞれの子どもの居場所になるところ、形。作る過程をシェアすると自分事になる。いつか学校としての役目を終えても、地域に愛される場所に。

▶今日の会に参加しての感想

いろんな可能性がある中で何を一番大切にしたいか、何のための学校かを考えてブレない軸が決められたら良いと思う。一方で理想と現実を考えた時に地球温暖化でどんどん環境が変化していく中で、そこも無視はできない。子供たちが学ぶ環境としてもそうだし、学校が地球温暖化を進めてしまう環境であってはならないので、そこも考えていかないといけないと思う。

移住したばかりで、村について知らないことばかりなのでドキドキでしたが勉強になりました。運営スタッフの皆様、教育長さん、秋山さんありがとうございました！

自分が持っている力や技術、智恵などがどう使ってもらえるか考えるきっかけになりました

皆さんの熱心なお話が聞けて良かったです

私なんかに参加してよいかと思ってたけど、いろんな学校のお話が聞けておもしろかったです。村のみんなの意見をきいて「学校をつくる」ってすごく素敵だと思いました。

村外の方や、建築関係の方、これからの子育て世代の方など、たくさんのこれまでの会では出会わなかった人たちが参加してくれて、すごくうれしかった。

ありがとうございました！続けてほしいです

大好きです。中川村

▶会の運営(開催日時、場所、内容他)に関してのご意見・アドバイス

村民が集まってこういう議論が行われていることにすごく魅力を感じる。建てる側に丸投げではなくて、自分たちの建物だと思ってもらえるよう意見を出し合ってより良い学校ができることを望んでいます。

一度、先生や児童なども含めて、各教室の役割や使い方など、教室の本質的な部分を深掘りする会があると面白いかもと感じました。例えば、校長室っている？(校長先生すみません、あくまでも例えです)とか、音楽室ってなんで四角なの？など、逆に何でこの教室がないの？とか(例えが浮かびませんが...)

第2回はありますか？すごくいい会でした。もっと時間がほしいくらいでした。教育委員会や役場の方ももっと参加してくれたらいいですね

上伊那に情報発信してほしいです。保・小・中学校に告知を配布してみても